

宗教改革者ルター

日本イエス・キリスト教団名古屋教会牧師

松浦 剛

はじめに

2009年2月22日に、日本基督教団名古屋中央教会において、賛美歌フェスティバルが開催された。主催は名古屋キリスト教協議会と日本賛美歌学会であった。筆者は名古屋キリスト教協議会副議長として、当日の会場へ時間のゆとりを持って出掛けた。

すると日本賛美歌学会会長、徳善義和牧師が東京から来られた。30分間ほどお交わりをした。徳善義和牧師はルター研究の専門家と聞いていた。何気なく申し上げた私のことばに、徳善牧師が驚きと興味を示された。「1963年から刊行が始まった『ルター著作集第1集』（聖文舎）を10巻とも購入した。」とお話をしたからである

徳善義和牧師は、「同著作集の第2集もぜひ読んでほしい」との勧めをしてくださった。「第2集のシリーズはルターの説教や聖書講義なので面白いし、実際に役に立つ」というてくださった。そのようなことで、ここ3年間は、再びルターの著作を読むようになった。2回か3回か徳善牧師と手紙のやり取りもさせていただいた。

ルターの生涯

プロテスタント教会の牧師なら、どなたでも知っておられる程度のルターの生涯を、私なりに表現してみたい。

マルチン・ルターは、1483年11月10日に、ドイツのザクセン選帝侯領内のアイスレーベンにおいて、ハンス・ルターの長男として誕生した。父親は農夫であった。家庭は貧しかった。鉱山で働くようになった父親は、たまたま働きが恵まれる。父親は、どちらかといえば融通のきかない信仰的態度で教会生活を送っていた。家庭における子供のしつけは厳しかった。父に審き主なる神の姿を描いていた。

学齢に達した時、マンスフェルトにおいて初等教育を受けた。14歳になってマグデブルグにおいて「共同生活の兄弟会」から導きを受けた。アイゼナッハにおいて3年間の学びをした上で、1501年にエルフェルト大学に入学した。1505年には法律学専攻をし、弁護士を目指すことになった。それは父親の期待するところでもあった。

パンテコステのころ、両親のもとに帰省した折に、突然雷雨にあって死ぬかと思うほどの経験をした。以来人生の方向転換を考えるようになり、同年7月15日には修道院に入る意志を公にした。間もなくエルフェルトのアウグスチノ会派の修道院に入った。

修道院での生活では、戒律があった。そのすべてをだれよりも熱心に守った。修道士の模範といわれる存在になり、教理と神学も究めることを怠らなかった。1507年春に、アウグスチノ会派の正式会士と認められ、5月2日に司祭として最初のミサを執行した。

1508年秋にヴィッテンベルクの同会派の修道院に転任した。この町にはヴィッテンベルク大学があった。同会派修道院のザクセン州総管長ヨハン・フォン・シュタウピッツがルターの学識と修道士としての熱心さに目をとめ、ヴィッテンベルクに転任させた。1502年に創立されたその地の大学の教養学部道徳哲学科講師としてルターは用いられた。1509年から聖書講義を開始した。

1510年12月に修道院の用務でローマへ行ったが、その地の教会や修道院で見たことはルターを失望させることばかりであった。1512年に神学博士の学位を得、ヴィッテンベルク大学教授となった。同年10月からヴィッテンベルク大学で聖書講義を担当した。このあたりから翌1513年の初夏までに、有名な塔の体験をした。

塔の体験というのは、福音の発見のことをいい、魂の回心をも意味した。修道院に入ってから8年たった。魂の救いをイエス・キリストの福音のうちに認識することができたのが塔の体験であった。

1513年7月8日に、第1回詩篇講義を始めている。この講義から新しい光のもとに福音を説くようになる。1515～1516年にローマ人への手紙の講義、さらにガラテヤ人への手紙の講義がされた。1517年に「77の悔い改めの詩篇」講義、ヘブル人への手紙講義が鋭意行われた。

同年に、スコラ神学に対する97箇条の提題と免罪符に対する95箇条の提題が公表された。この95箇条の提題が、宗教改革の発端となった。これは民衆に向けて書かれた提題ではなく、学術用語のラテン語でしるして同僚の神学者たちと自分の教え子である学生にディスカッションの教材にする程度の意図で公表されたものであった。けれども誰かによってドイツ語に訳され、発明されてすぐの活版印刷機によって相当部数にプリントされて、人々の手に渡っていった。そして、少なからぬ人々に影響を与え、宗教改革運動へと拡大していった。

そのころのドイツは、各地の諸侯が領主として治める数多くの領邦（小さな国）に分かれた形で成り立っていた。しかも神聖ローマ帝国のゆるやかな枠の中に組み込まれていた。各領邦の諸侯の中には宗教改革運動に同調、賛同し、カトリック教会を自分の領邦から追放するケースも出現した。ドイツは、まさに混乱と分裂の危機の中に置かれた。

当のルターはというと、1518年に第2回詩篇講義をする。「ルター著作集第2集」3巻（リトン、2009年）の第2回詩篇講義の記録を読むと、福音的光が輝き出ている、生命感あふれる聖書講義であることがわかる。同年にハイデルベルク論争がされる。1519年にライプチヒ論争がある。1520年に、「ドイツ国民のキリスト者貴族に与える」、

「教会のバビロン捕囚」、「キリスト者の自由」が著述される。これらは宗教改革3大文書と呼ばれる。同年に教皇レオ10世から破門予告状が送られてきたが、ルターはそれを焼却した。

1512年に、国会に召還され、ドイツ皇帝カール5世の前で福音主義信仰を表明して譲らなかつた。ルターは破門された。ルターは、支持者であるザクセン選帝侯フリードリヒ3世によってヴァルトブルク城に保護され、新約聖書のドイツ語訳を完成させた。

1522年に、ヴィッテンベルクにおいて、過激改革運動が起こったため、ルターはその地に帰って正常な形にととのえる動きをする。1524年に、農民戦争が起こってしまい、ルターは対策に心を労する。無理に解決をはかったものの、妥当とはいえないものを歴史家は語る。1524～1525年に、エラスムスと自由意思論に関する論争をし、「奴隷的意志について」を著述した。

1525年に、カタリナ・フォン・ボーラと結婚し、健全で恵みに満ちた家庭生活を営む。子供も次々と与えられる。1529年に、ツイングリと会談したが、聖餐論で一致しなかつた。1530年に、アウグスブルク国会に最初のプロテスタント信仰告白が提出された。1534年に、旧約聖書もドイツ語訳ができ、聖書全巻がドイツ語で読めるようになった。

1546年、出身地アイスレーベンに出張して課題の解決に励む中、病気を発してそのまま神のみもとに召天した。ルターにとっては宗教改革の動きの途上で自分の生涯を閉じなければならなかつた。

ルターから学ぶもの

ルターの生涯の概略を記しながら考えさせられることが3点ほどあつた。その第1は、ルターの福音理解の足跡を忘れてはならないことである。

ルターが1505年に修道院に入った時、心の内にあつた願望は「わたしは、いかにして恵みの神に出会うことができるか」であつたという（岸千年「ルターの礼拝の神学」、「礼拝と音楽」39号、日本基督教団出版局、1983年、5ページ）。

中世ヨーロッパの教会に集う人々は、善行を積み重ね、宗教的戒律をより厳格に守り、日曜日のミサにおいてキリストの体であるパンを受けることで神の恵みにあずかれると信じられていた。

イギリスの詩人、作家であるゲオフェリー・チョーサー（1340～1400）が晩年に「カンタベリー物語」を書いた。その中に教会の教職者も出てきて、巡礼団の一人として説教する場面が何度か出てくる。説教の内容は、まことに中世の教会の信仰がそのまま記録されているように見え、福音的輝きやひらめきは感じられない。

ルターは8年かけて恵みの神に出会う道を求めて、十字架と復活の福音にたどりつくことができた。塔の体験をするに至る血みどろの求道が、聖書のみことばに行き当たって、信仰義認の確信に立つ。後世のプロテスタントの信徒や牧師は、ルターの足跡を無視してはならないと感じた。

第2の点は、ルターが書き残している宗教改革3大文書をはじめ、多数の著作は、今日21世紀に生きているわたしたちによって読み継がれていく必要があると信じる。「ドイツ国民のキリスト者貴族に与える」、「教会のバビロン捕囚」はページ数も多いし、文脈もつかみにくい。「キリスト者の自由」のように冊子程度のもので、これを読みこなすには苦勞するが、読めば読むで、宗教改革者の生命線に触れることができるし、靈性が高まっていく。

聖書講義や説教も、19世紀や20世紀に試みられたものとは訳が違っている。時には退屈するし、途中で投げ出したくなるものも少なからずある。しかしながら、ルターはそれらの聖書講義に命をかけていたのである。プロテスタント派の後の牧師や信徒が「うんざりする」などといってよいはずがない。

「ルター著作集第2集」10巻に「第1コリント15章講解」が載っている（聖文舎、1988年）。1532年8月11日から1533年4月27日まで、日曜日の午後にヴィッテンベルク城教会において、17回にわたって講解説教されたものである。病気に悩まされるルター自身の戦い、夫人が出産し、夫人自身の病気と子育て中に子供を死なせないことを願ってどう命を守ったかを、復活のキリストに重ねて、大きな望みと力を伝えている。民衆レベルでは、宗教改革運動のスタートから16年たって緩みかけてきたのに、喝を入れている。ひと口にいて「面白いし、まことに興味深い」ように思える。

第3の点は、ルターのプライベートな生活と讚美歌創作などの才能に言及したい。ルターは修道士が誰ひとり結婚しない時代に、信仰と勇気と愛情をもって結婚した。ついでに言えば、デンマークのゼーレン・キルケゴール（1813～1855）はその時代のほとんどの人が結婚していたのにもかかわらず、生涯を独身で貫いた。ルター、キルケゴール共に、並みの俗人にはできない私生活をした。生活即メッセージである側面がある。

ルターの牧師館には下宿人が10人も20人もいて、ルター夫妻はそのような人々を養っていた。ルターはビールが大好きであったようだが、ルター夫人は牧師館の地下室で自家醸造したビールを主人に飲ませ、元気付けていたのだという。メソジストで酒もタバコも飲まない筆者にとっては、天地がひっくり返ったような話である。しかし、それがルターの現実の日常であった。ルター夫人は下宿人に新鮮な野菜を供したいと願い、畑を購入して園芸作業に余念がなかった。髪の毛を茶色に染め、金のイヤリングをして身だしなみ

にも心を用いる今日の牧師夫人とは生き方やあり方が違う。文化や時代が変化しているから、そのようなことを真似ることはないものの、基本姿勢では、ルター夫妻の家庭生活には学ぶところがある。

ドイツ文学者の小塩節氏が、「キリスト教文学事典」(教文館、1994年)でルターの項目を担当執筆している。同氏によると、ドイツ文学・言語史にとってルターの働きは大きい旨の記述をしている。その一つが会衆讃美歌の創作である。ルターは39編の讃美歌を作詞した。どれも簡明で信仰の力がストレートに伝わる作品である。教会においても家庭においても、讃美歌を歌うことに喜びを感じていたルターだったとのことである。ルターを過去の人にしてしまってもよいだろうか。

